年々随筆

四

内閣文庫
和書
一八八五六
號
類
三五 函
五 冊
一 架

内閣文庫
和書
一八八五六 號
類
二二二 函
九五 冊
架

内閣文庫
番號 和 18856
冊數 5 （ 3 ）
函號 212 93

国立公文書館
National Archives of Japan

堀氏文庫

花迺家文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書

随筆　癸亥　四

皇國にて上古ハ同母兄弟（ハラカラ）をあふ事ハなくて異母兄弟（コトハラ）ハい
まだ今の世とかハれざりけることにしへのもはらにいとくハしくなりぬ
夫婦あらしもあれるハ世ゝのなりの三条のおきとふくめる禽獣よ
ちかきに似たりけれバ古書をもて考て人情をよくしりて猶も
へんおのつからいましめある事なるべしさハなき卑きことなく
夫婦のまじらひハ女の家へかよひし事にて今のごとく
夫の家へむかへとりしものならねバ其子ハ其の母
のもとにて生長（オヒタツ）するなれバ兄弟といへども疎く他姓
の人と異なる事なし女もその頃ハいかなるかきりあらん

淺草文庫

はかなきもあるへしよき女なとゑらひていへそえてしかなとおほかたハ今の
性なるよからぬしくさくぬるある中なれハまさきもしなと
きわしさる人情のよる所なる思神もゆるしのなれ人としらめ
けりしこそもとよりあるなりけるよ禽獣もちかき事
しらぬにはさらるを同姓不ニ相娶一といふ事を準としてあし
かる事よいはれなき人もあめるをいふなとなる事之同姓
相娶らぬを周の世の法なれハこれ周公の制よそむなりと
いふも我のこゝろ不なりしなるまそむなかといふ率性謂ニ
之道一といふ事のあよそむくへき皇國をみのつから皇國之
周の制度をもるへき理ありしやはていふし夫婦兄弟
に婚しハ世に乗るるこそハなかれし今の世のありくからハ
ここはしらふもおなし不字まかりこくろうらもおなし
定よおひいかりの事れをかれよあなをまことに禽獣よちかく
みそうるしき事にて公にもきしき法禁ハあるなるへし
古と今しらかれ時まろしいかれ是非をある不しとこそなれ
学者ハ何事よつくてもこれ沿革よるところを見るへきなれ
なり。
異母の姉をめとる事上古ハ宮の家あめしその本居に
住みそも宮つくへせしもの女もその本居よすまるなれハ
相娶るよもなりこれはよりし女のはゝもそれてありへかない

さかしらよのつねにて女やすらかなる人は女
ハあめくそのはしまありてそだちハこゝろくるしくてしが
よいさわけてもみなし母のはかしくして生長するものに
しあれくこゝけるの兄弟ハ中まに國郡にてそだてらるゝも
ありていはしうとき中にわかれハ娶帝事なと侍ら
ぬりし之平城の京より百官の第宅大かたハ帝都にあ
る事なれていはぬれの家もかといへるしをかれてあつ
まりゆらないなしまする事もありてやまさし勅しされハ
やうしよね娶らねやうにみなりしとさえて事の遂なのよ
おほくハえ守られ制度なあらねハ人情のしさの常

なかはまことにいまはつましきものなれハ母のつゞきあひ
人もあまたくて筆録て今の宮とふりて人情よいる
う快からぬ事すおおしいしまゝそ萬葉集に玉藻なるていふ様の
象なれとはる古象ありてとれたるみゆるべしいもしものなくしきを兄
歌の姿もはたまゝし疑ふへうすまの卿上の称之
て書はなりて侍る参議堂中まゆく芳野の川にあせなん
妹脊の山をこえてふつ移く近し参議峯守卿上女妹脊山
ひけるよこえてやるぬへく吉野の川をまされとそ昔ける
新千載集にいもうとの影みまとらえ家やるぬへく芳野の川
ハよそれとそ我身ふと中侍られしハよある濁る瀬ハ恭しきりそ
水しおるハすみなんと流たのこらとゝろめ又續古今集に

身なりなん関瀬もしらず妹脊川わたりそめぬべきころなれば
してとあり。世にふけるならひなれども伊勢物語に袖
にかかる若菜をつみいへ返しにむすびあとをもちひ侍る
ためしとありし。しなてハ今の世にきのないといふよりの跡を
その間かくとおもひまなべるからしに。狭衣の物語・源氏宮
ハ大将よあひのかんいとよき所あらいなるべきことをかけ侍れに
名高きものを言のおもしろしおもしろしにかえくゆかしかれ
わななりしゆゑぞ。これわたり侍るこいかなるわかんと後と
とよ禽獣なり。
續日本紀に養老三年二月壬戌。初令天下百姓右襟とあるハ

それにわけさハ左衽なりしなりて。今世人への左衽ぞ便あ
しきゆゑにあれば常のことこそ中でも右衽ハかうまじく
うしても知べからず何もなれさるを便よきとおもへり。大宝の
衣服令ぞ。唐の制によりしハいはるものなれハそのはじめ
礼服朝服ハ右衽なるべきとれと下ばよの者ハ。今の世の褻の服ども
ここならあるまじきなりしのましとぞ有なし。ぞうしもまなハ
すらもかうこれをいやしなにいにみなハこの学者ならなか
なき事にはつめるハ。論語に微管仲吾其被髪左衽矣
とあるかいやしなるよきところゆゑなり。此被髪左衽ハ只
夷狄といふ事なるをおもひなりしてのことなりとて先王

の私制なるハてこそ、衰狀のやうになりけるハさらにもあらず
常なりけるその實狀をいはしむるにもあらねバついにかはる
なあり。被髪左衽なれる事なきにあらず、文化内を尊ぶ化
外をいやしめ本國をあなどり他國を尊ぶハ古今一般の人
情なるか、聖人といへるもの尊き事なりける孔子すら被髪
左衽の國となりなんとするをバ、髻髪左衽といひて卑しめ給ひ
むず。浩くかゝる上天の気なるを憚りて、左衽右衽何の
差異かあらむ。すべて後世のものどもの論ハ孔子の語
ことばをまねびたるにて、それ自らの心よりなしたるにハ
あらずといふべきなりけりや。

古き家などを廣く尋ねもとめて見よ。多くあるなれど
心ある人ハ中々に厚葬などいふしきおきてハ
なく、世波の為に山城海賊などにてもあらぬものなれバ
中々に偏なりし皇國ならでハさかしき世なれば、ことたるを
しるを無てなきハ事なく物にても、勾玉陵などの
たぐひの古き物どもいふべくハ、やしなはれたる
いとそばなる記ありけるを、古き墓どもおほく有るに
出来たるいはひしきものをいへるこそその霊なる
かなるも人を座めたるなど、文字の礼義世の遺
祖。あるハ同氏同統の人なりしいひつたへてしげるべし

人としも損なる背をつきあつくハ清れてはしをそらしぬき
あまりまね閑しかみあしいねくすしめしみけられて
身のもら流そる宝きこ流をはる其れものゝく方に
ねしをうらて古を考るよりこそいふめるはし
わりあしきをはせとも考えるべき事なくハそれ恵るを
ともなくてふすりあし心いゝしへを考へ心なしハ書なとやハ
らぬ書をよんあきらしらる力なくてハいく百千の蔓を
あつめきていくらまつはの古き器をえうとし何事
ぞらハ考いてんいしやてなき事なりそもしりらし人
無けしめまりもしね事しとりなし世のくつきなき

まとにら忠なれとわかハ定ことしいつなるを清なれを行ける
はるく方もあるそされも好事しきすはとハわかよこうるる
死なりして行をしよろよいひかるなしまことまよいとなん在
なしあおけらし
主ころしの例ハ眉輪王なれしといとやんごとなき皇親て
赤らとも年いとあかなく親のはらあるてはへあれハたよ
逆臣の例しといひさとし蘇我の馬子そうしくし大み
なくしきるとなくもとくとしまさ母みかしかはへて君をし
せまつりなれし又親ころしの例ハ推古天皇三十二年
示有一僧執斧殴祖父とありてされを伝て僧正僧都法頭

を置たり事なる也。律條にも祖父母ひとりを一殺しつれバ。
これ的例なり。佛法ほろび来ていましめ戒許なるを一人出
比丘一人ハ優婆塞にて。うろ禍の門ひらきぬんあやしきまで
はかなきをしも朝廷に学びいはひのひめなし文あやしきまでこ。
夕されバいふ傾されだく去の字之春待付て秋されてな
といふもしるおなし意の去の字ハ助語にて意義なれ
うたの詩にも老去擲去なとの去をとりて和漢符合せり。然
し去字の義ようなとしはともいふ説えしき事にや。大蔵卿行
宗ても家集にはいねさるゆる人なき夕されよいかすいひしも

神嬪の夜。治暦三年三月十五日備中守定綱朝臣家歌合。
基綱朝臣かすみぬ霧にゆふされの春の霞ハまた作りて。
きの字は義としてハしかものとまつりすなる夕ざれの説之なり」。
江戸人のはやりなき人ならうしてヤボといふ。世説注に意趣野趣」。
古き物語に草花なとお栽といふ。庭の風俗。花の植る地。
をお栽といふなるよし。あり江戸人ハ大根千防菜類をし
も前栽といふ事も流なり。それハ後園といふべき。
ひきなるより皮の名なり。蝦蟆の層なとしてなる紀
これハしかいふ延喜民部式に。皺文皮とみえたるなれ
なり。刀の鞘とするなる皮の名ハ尻鞘といふなるを。それを

皺文皮として造れるハひきはだのしはやうに見ゆる今時
おほやけてひきはだとよぶ虎鞘の事ハしるしたり又今
院ニ成通卿の事の述記せる所ニ白河院法皇のとき
の人にてたがひにきこえし殿上人の中にてさゝひとつのものか
はたてならぬとして雲ふりの紋章にひきこえしたるをさし
きのくハりかゝてかえね事にてたゝらくときこて資遠とて
待しひをるしれまたとうるハそそちまゝへしちうくつるか多よ
るにやにしきぬ多まりてなりしれたまひとそれハかうたくたか
して乎り元とそひきてさる事のしに濡りやみへとやせと
中にうりそれそあしよしいみたつしきハ乎くてまことに奇怪

なりとぞ仰られるに近衛の官人なとハうとうとしき所なく。
花のさまかたちのうきみてそめつくらるにへらつらあるをひき
はだのありしくおぼえしめしれるにやとるくろくろひきと
さハ何ともあるんなれハそそかにと言便よいひさして皺文
皮の狩衣に附桐紋ちゝらにあるきるくしくひきはだ此精衣を
見なるいしくしたるさる雲かりの紋章見れたることなりしたるぞ。
備ところ奇怪のよし。
俗間に小石をざりといふ事あまさされとしと同言なるべし。
されもさりもさしく薬やもくとりふ吉さを形容しける
之。十訓抄に三井寺の覚讃僧正年ごろありて有職をいふ

はやるゆへ。熊野に詣て。山河のあそびとなりてしつらひなへ
かきうしみの名をや残されしあり。はやりしは古き事也。
近ごろ大口ハ孔子志てさし付たるものなりといふ説
ありてきく。今此ゆくにあるは寺んがある人云此
流をよろしとする事なれども。称坊のふた志らし次。
大口を絶ま下総あるゆへとしよりニツ付る事
あそぶものゝ会にてまねてきたる也。意ハ会にしおそろし
なましさん時見へるしゆるまじき用をなし有べき。
袍にて。なすか袷も單衣もあれども。それ〳〵下総ハきるを。
袴そへ。なりて世須ハ赤裸(ハダカ)にゆるまでなくてなる不ハしあるべし。

いふてなきわてきはらんや。もし大口の釋なしハ單衣よ
り下にきるべし。ひとへハ今此ジユバンハやうなるあたるに先
ジユハンと見て。其うへにはゆくする事もあるべくもなし。又染
装束ニも大口用ひると換る事なるはゆくに風流せんハ。
とめのすまひあそく。畏おそれある事なりもうしろ
なる時ハ指貫にも略して大口ハつかひてあるも常の事也。
いふまなとなりしに湯具あらはしてなりんやうなし。
大口ともくちなくも世当に此大きくひろくあきたるゆの
名なるべきようくすへきおもしろし料なしし大口も世富もお
なぬへくや。信いふし。若き者は古としても大口見たるおもあ文。

有とおもしく〳〵もうくをへきおもくはてや八方へき事大口八褌
まかき交そのゝ褌ゟ単よりも下よ見てこけ縫かりし
あかり後三年合戦の絵詞よも見あり。縫殿式年中御服條ニ。
春季云々。表袴中袴各十腰料。絹十六匹四丈別五尺。糸
三両一分二銖別三銖。袷袴単袴各十腰料絹十一匹二丈。
袷別四丈。単別二丈。腰料八尺。糸二両三銖別五銖。とこそ中袴とある八大
口之褌八古ら八表袴中袴もしりへて下の八名とりしへし法礼よ
付、おもしま次今のゆくなかり料の縫まて縫かりし事も
しらるる式の中よ御料と卅王の法料とを除て褌とい
ふ物とえは大方八祭服當色なとしすりまはらても法ゆゑよ

よろしくはあまてそへてすけるへきにあらねとこそ覚ゆつ
うき御せし事なるへし。もろしの日記なとにもはかまよええ
とかく事なきも。単よりも下よみしらくてかりもへく見ゆ
月にさゆへきよあら文有職の家に案あるへきこしあらねとも此の
つらう記しあらはるなり。大口八褌なる故よしあらし交又中袴
といふ事も法料と卅王の法料とよそえて外より八なし。
表のゆゑ八褌なしとそへて三ッ並へていふ成に大口と中袴となれ也とも。
褌八何となくいひおへきあしもあらねとも表袴と大口とを
かさねて褌と外物よしいるなり中袴といふへき
ところあるなし。奴袴よりはゆるも大口とおもなし抱なる。

さて八やうそて下襲といふ事。褌と名を同しくせり。褌ハ外
物にしてかくれへけるなり。
緌といふ事ハそのもと文字によりしハかうりのひけなるへきに耳
のあたりに獣の毛もて扇ひろけたるやうにしてあるハ
いかなる事にやそれ事ともいかにもひつるにはさみ
考ふる事ありけるハ衣服令に皂緌とありて謂冠
紘也とあり。その紘字ハ左傳に衡紞紘綖といふ事ある紘
を纓自下而上者とあるにあはせてこれをみれハこの緒の
なかれを頷の下よりあけて二ッの端を耳より上にて冠に
貫き結ひて残れる緒の末をみちかく切すてしものなり。

さてこれを二の端にはさみて此毛水干の菊とぢにふ
りのやうにしたる其菜とぢし縫糸の末のみだるるを
形容せしものなるをこれハ今一きはの威儀あらせんとて
毛もてつくれるなるへし新宮式に緌八十二條とありて緒
なれハ條としるへきはこれを時のことさき物ならしと枚いふ
馬のうきものの姿なれハこれを武官と賤者とおほつかるものにて
ありし立にはことに落冠せしの用ときなりし老懸といふ
名ハ老人なと本鳥なくしてそうりおちくしし人ハ文官もそもそ
送らぬへきうへあらはしても又かなはといふ事で冠をぬりてこ
めさる程のおしやあはんかるハ鬚鬘の附の具とせけるなり。

有職の中にも常にしりたらむことゝいふは志ある輩也」
学問に志ある人へも古と今とかはりありといへ共ともし
思えむし心うくへきことは古の非今かみえいはいかり
うしぬ沿革あるものそ事をわけてさゆくへしともしらすうち
つかまへるもあわか志かるをたゝ文章かりと今の世の法度
とをおもいはわる事て大たいこゝよのことんのをきよ心得かすゝめる程まて
の月こゝかまて杯よ叡慮事のゝ之にゝ上へはそのうち諸家
の仰とりふに家禄給かたまはりしあもわつ受るあなのつ志へ
きるへき也も何にもこのゝ之本面朝夕つかうまつらしもめゝ
さゝあのまいりぬのことよわつ次大饗抔詠をゝ何らわしの御

いときとあれは装束調度容儀指布などあてられておせし
ものさいとむみそのまれあるはよくしんえたるしも人に一撮
米一文識もまいりて何事もふとあしてよろひるしなく進
つかはれしそのうへよ抔あてられておほとくやうれなることなるあ
らなんやとおもふそてやは有へきこそは今の世の法家のゐ味
いふものゝ常に訓ならんかわりくさとふ之よう古を味く今
よ惑ありおんへそ古き書とむしとすましも故人有りの論せん
とすることその説のあるるへきやうわかましや古哉ゐとやさ
そくいあしもつるのいくたる事なときくにゆきゐるとさくいはつる
そつかのへんえしるあるゝの事よとの世のりた持しへ

ていはのよしあしハ。当世でハ見識をしんしやくするを風。
むかしよりみえてハあるからハ今すこし書よう路く。しるし
つハかりまてつゝみてハあハしものをとあるれてこゝろうつし。
近くいらの沿革をよしあさしめんとおもふべき也。しかハあ
れしさ事見識といふ物たきしてはしく書をもよするわきゝ
めてけなしえけるも情をれていりしくるなん正明らめん
はきしよあいかてその大概をうきてはらくましとおすく
しもつこみしてんえねるもかし多かるくに家まてうしく
弟いにはなくしていましこえありて次代くの先達らにもおまなひの
古今まなもし疎そことあしらや八おすつるはれとこれをも祐

ところりけもいわ事をいつるかれれきらえわくも宗する
事なお今うくあしけわぬものしおくし格を抜あるる
けらんや。
中ころと赤肌のころはらをとこの外よ恥しれたる女と
兄弟夫をともなはしけしじらひてハ見え寸ル帳へらそく
物語なとせしれ之禁中なとも文里まてもやしらそも
はる所をお入するに筵そこなとしきてゐはるなる所をとるき
まなよりき人ル帳ある八顔よ扇をおあてぬをかくし
するまことにびらむ数といふハ今じしといふところの髪を
魚のかしへまもちるのかしまでなきりけて末をとくへ口わ

うしろのえうくするに白きハ髪のちらにかくれて
片そくにおもハるえはらやうしもの(に)しらハかくてそのまを
そきて短くしてしかれハ気へいふしくしこふかれぬる
ましろく扇をさしかくしてうらわなき時ありなてゆし
せし料りやわしし。大和物語にみえし月のおりのき
顔、ごそれをる法息所のはなくしをみありなのよ
はもとにて忠はみつひろかり、それにあるふやうしよあこき
うちき一つはねきたる女れいときよなみなおゐまていみし
なすきみなりる、たるをらくめしてこせのひなれくるなり
おかしていふしうなく、枕草子の中に清少納言の中宮にハし

見えて参りたるかと伊周のよりいへられて恥しうわしきわ
かゝる所よかしくきこえけしはへる扇をはへしかのゝるに
かりくへきに髪のあやしけなへみゆるに、えとあり下す
も衣も何きといふをしてあるハよ人の器るましき用意せし
まなわ、下つかたの事のあそれと七十一番の職人歌合に立君
けなつき見ゆる場あり、これまで大かた世中のはましらかる
此所ハしめて京よりしりしハ京極のはしめなりきと時ハ
被衣きたる女をはしめつるよりなはけりはきたりし仰し
はやりの人もいひわしあらず、又尾張闘なりても、六七十
年乃いましへも人ゝなきいかしものといひはなく、今

古き家にてハなをさら人の身まへありし時ハよく精を
ろちかるハ三昧なましいか不ぬそ志てらしき比ハおとなしき女となる返
さるゆゑに女ハしろきころきを今もきるる名しおきまり
皆てかきといふ世白うりきの事にて凶服の名のやうに
なりしかハ又白ろきうらいへてむらしきうらかしこのうつき
を染ろつきとなづく容ころひかれし中ニも降波あかの名古
屋にて八田舎めきたりとて此ほろつきハ着ぬ事となれり八
く紀なりしきこえし志かるに此江戸なとの女ともしハこれよ
領をひろくあけて肩まてもさらけ出す又襟きぬハなくて
の事なれとうらうらしきぬにもをつけずといふよりえてすれハ

袵おもほとにあゆむともむく〳〵脛しろくうつるハいと見苦
なしひとへもうら〻とハ袷ハうらはねうらをぬきては
指のはきなしもなはいはゆるハはもと朝野群載にはやさる
進退傳ニ取レ笏之後不レ顕ニ両手ヲ一左手之上覆ニ其袖之端ヲ一
側レ手隠レ袖取レ笏とみえ又弁官抄ニ欲レ揖之間以ニ左右
手ヲ一把レ笏不レ顕レ手まして持レ笏事右手把レ之不レ令ニ動揺一笏以ニ左
手ヲ一引ニ右袖鰭ヲ一天人差指與ニ中指之中ニ一引夾天拳ヲ蔽（カクス）
人差指許令レ出也とかくこれ類なるか多くれとおもひある
ましハ一ッ二ッハ比ハおよそ袍の下に袷きるしも表着の下にハ
大口きるも指貫のしたより濟きるも又縫腋のしたより半

臂きるも。ことなることひで暦あらんはじめ事なと記されし
ての剪をなせり。志かるに今の江戸はまの諸家の召仕ハ侍とある
ものまでもして下すとこそよろしからずまで。ことさらきびしく
くして赤肌をあらハすを礼節とするなりしハ乱世
なりし中比より出来しならはしくしく見えしを今もなを
そのならひのまゝよ尚そるなりへし。下すはりきり。ゲハエン彎
の者なといふよいさかひてハ常裸(アカハダ)にてかひな肩のあたり
尓ふはりしの絵を彫りいれて墨をさしとこゆるに青く
赤く色どりなどして父母の遺体をきずつけて風流する
おほましき事なり。さて文身といひて。うし出入もいや出る

事なりし。又その頃ハ良太になしおこなひてある事
ハおぼれて志ほりしいひもすして人なるよろしまる事ハ近く
しなき事まで附会の大仰され月代のすき所。纔中
よりみえしとそ荒涼なる事よ玉海しるしたまへりし
を。今ハなくて惣ほりしきりものハなく月代もひろげける
そのかみらかれにてはりねなりしハ此比いひなる事にて有ん。
長髪にてもしへまでそかしこ傳といふよ附世なふるまふ
かりけりていくはまりまでやハく総なるくはりかし。
文身ほ法事にてみずかひおせし事あり。今ハ六と分けかり
なりんうし。麻生の谷町尓彫八といふ工匠あり。一日きたり

おねやしてのへしをはさくを書みろきく。おとかの人
くしよつゐるに皆来つとひて割をれとはらよ竹を手。これらふ
やう。これらる木して家ね立つるいらしう後うしきに。
おのまじら世のうきわりいをひてあよくる貧しくいひつく
立はまく。人くせむらるをまくて。きいし恩をよくりとしれ。
何りし狼とやー大名お八りけ候。その里恭の稲荷の社を
すりせられる。おお八その事をうけたまりて造りつゝる。
様よ入れる木をあとけおりましへ用ひして、そのをへお
もひら負へてせしおもて作ると心つてれ息たれ八法し
もみすやまし。のすふるか。さおく。るほよ木おり作りつ八やそ

販く人情め奉らむとかしろおわねきや世をゆるく候し
きしもみすくて二三日八過ぬ。夕つかさいくくるひはなる所よ此あ
とかの若の者何りしとや。おお八ヶ家をもさつる時をつね
つゝ八れて世をとらるとの人かくおね狼をときゝて。心をかひて
来さり深のあるりよきるものそしき八わりほまつひて。
みもしりし裸(アカハダ)のましてそつと入来ていふやういつもおお八
八およそるふといふ事八まくくろといふよおお八りしるわりてはる
事作れとられ八らくろわそあかる事に作るをとりしお
人のかーたおすりやとかるひしいふ事ほまいるうおそれうりと
こゆさとをとくと八つ孫おお八ヶ頤の下よそめこかともやしおく八おの

れしてそみだらしきふまなれ。ならへしるすまうがいとんと
うきなれとはなれしみだしてむ。こまくおつる事もこれあれ
とうけくみもひなりていつ。るいれるはましてなそうき私
うさ我八ゑとなやますん。やくみちなんやはうをいうき
めらせむしといふていよくしうしるるとく。今みち行ぬへし。
いふうしなすをあのひそやて。を押すりてこぬ汗あえ液をと
していいとくるしなえはし必くいひておくいく。跡そてね
まくるふまりさくおなしはまへ。家のくちの人く。なき
おちれつゝん。ねあはじく狐のしとはらとみもひなら。
うのなくくもおなしやまま心もえわく。文の跡く来まう。

我八ゑるよりおそれかしとゆるはまきのふ尓吳なりすはて
八頭くしもぞわりしとみりひて。なきうみちはけむ。さうく
と責もよるしてはて。うくわねわくいぬなりけ足遠り寄。
ねくるひ言なまおうもるひて。なきのやりうか。みのれを忍
うきしみなみやくいる方。はらなと今はみぢうん。いとうま
なまるえつるものそといてねくるひ。はるゆ念ある律にし。
みのれむかし熊野よすし。ぼ文覚上人の荒行すして。
那智れ瀧まうしれてかはしつるうと気るわしよむ。しきいと
しく。荒つきさくいうりていと。してもみそろしなかり
しう。れしか肩腕よそのうるを画きさうとまれしば。さしそれ

たとへ死して身ハくちぬとも、そのなハよにおゐてすつる事なし
ながくしてあれハこそ、いしやう人しわきまへしらされ
しかしてかれ嘉りの後ぞゆかりきゝて得よみしつゝそて
益しうしおそろしき心ハいかにおもひえがたきつゐにせち
にゝけり。
ある里に古く死しける名高き虎といふ事。子めんなども多く
もちたりしその里の庄屋がしきこゝろある者
にて世にもなくきこえしおもふ人の死にけるをも
中にそなのりきもののふにおもしろき何かの作事なとあるを
うけたまハりて、笠程のまゝに紀しやといふべしとて。

も里。あつかりけれハ、かしこまりてもいきやうハあるものなれバ。
ある日虎庄屋がもとにきたりてせうそこ申しに、庄屋おどろきあ
ひなり。いかに虎どのハいかにして肥満しけるぞ肥猿
して身ハあまりにめでたく用をせずあるがゆへにいふことなし
毛の色までなどありてしかるにそのそいてかはき
ましりてんのありさまをみつけてかれを子などもよびあつ
めてなに庄屋証據をまうしてつかはしたりけれバ、たとへの
つれなきときんの死もせなぬそもなし肥満にハならぬ事まで
いひて子どもおのれも立かへりそれハ身のつねなりと
しりける事との念ありもしきまへしき大事なりあはれなる

思ひとつめられは命のかきりまてもといふてくらしてまつ
らしいふれありはねとみをしくしのまかるる大事に
まれおもろいのふかれしき店屋様のはんはしかるへし
死しまいひて命ねてもみおそろしとおもひさか太さ
覚んふの不當まおもそかはく死なんハはかりのうへそれ
まゝのひていまんをはくしつとこのあまりかりしら
らすゝてせめられておかゝまするへちゝきがたハ慈事も
用ことをくハゆるかたにいまんとやすんすきをねともかきたい
りてこのしけしそもしくしむまむしくハ何事もあわむいう
ておさゝ家人よあひて閑定てしりかゝおりなかきつはく

おかつかしみもむひとかゝそれきりて何わたへしのふ何
みはれても死ハつとみなり身ねをあしらる事も用ことせよ
とありつ係は詞もそておやう事ハ定かねといひてもあいハ
身をそれもなよこともかうてもさうとひしきハ虎か身のう
へみかはけるまても祀勝とそひてき人かとハしよその事
りやあしむともきしろやとそれもまるわし事もあれと今
といふてうさい養ミ左筒せるとり外のるはハ何事せし
侍りとそいふにひまんしのうハはりんに座屋敷様のいつく
ひまんせしかゆしき事とハいふそのかひしはても
身れ置不みきまていまんするやうやハあるかあまし

なくいへも。天道神明おハしまし候。ばんじなくしてハうくい事苦
もなく候はぬへし。物のまふよん。らの沼ひまんなるしいまん
にせ申まするも。わらを耽きくしもすへて口おうそへしもおう候。
はかりてもうくて。おいしまかはハうらめられのひいていきうり
さんまつ二ヶ月なりり八隣國よ立のひて。かく必世上の事
しきりりて中りて若中けいしそおし立くや風月
出えても何申しあるへしいもそんす。子ふからいくらえすせず
いて云中にあまくいふをよ。庄屋うもれゆきくしあたなる。
うへにおハしまし候うといふ事。何事そとへくは以ろは虎ハ法動
申しく今ハ家よ作しも母なとし事おいてみなくうとく まうて

んなるしう。勤久れ。嬉しんかそうのうなかり行よいく
あられよ恩のへうれ侍るとつひて。まことよひしなみり。
病気。今よ此えうと虎うまらけりけるを。かてつそよおひ
もせけりきはなりかりしつる事もなうかりしよりて侍ハ
いかん。肥腸しつるうち多事を作り侍るとつとくけず
侍くいふよなをくして。たとの大川うが。肥腸とくやとり過
さる事そよ。大酒のむなりや。わかまりてことていなしなよ
きえしうも。中風なとのおこりんなゆくしけよ。湯薬などもし
てせらもおりひて。用ゐせられもいひつるハ安てよく物よくれ
ちゐてはてハ事なくわなりとてうれしうわなるとそ。

殿（ドノ）といふ事は敢て其身をはゞかりて居所をさしてよび奉れる也。
尊称のうちにも多く用ひて古し。様といふは方角をさして
西ざま東ざまなどいふざまの字也。五百年外の日記にも
見。洞院様。西園寺殿など常なり。これ様といふ
詞をいふに同じくて方角をさして外くのいふは
するなりとて人の名を人に対して様とも殿ともいひ
し事はなし。室町殿の比より等持院殿様。鹿苑院殿様
なとのふうとて様とも守殿をもいひて尊卑なくさた
すれはおほくてとの殿様とも[illegible]にかゝる事はまれなり
今も此[illegible]もむきなれど。なほ方角をさしたる本の義遺りて

いはるゝ也。茶壺といふ事狂言に判断なしてさかひの人不知
換断の候ところ事世上なくていひしより今なりし
てきかえず。尾張浩冥海の民はゆる座房の候。当今の候
嘗の候。殊宜の候といふよりあのさしが外をはく
す。なりはんある者は詞をなれりとて敢ていはすぐ民の
[illegible]これ三百年来の古風なり。
こゝにはいかしいふやうにおもひて当るきいやしきるか
のしる。五月をいふのまて五月とよつき家々
[illegible]つゝ[illegible]の[illegible]限まさつてこひよう
事もと二十年以前まではまへにはかくの事[illegible]の[illegible]

みめかたちもよく、ひつせきもはなはだよかりしとぞ。はかりしたり
おしへねがひ世にたつるもありしとけるハ将とも
れども、それハ安永五年のことにて、廿八年はきのまえ
はやりたりし、このことわるものなれハ今ましなるなれ
すてたりしにのこるあめりはきの度よりて療治
せしハ、此比老たれて、当の用にもいれて少く此ころむかしの療
治せしハ、はきの度ハまだ書生にて、その術もよくしらざりき。
はれて業もよくもわかりかね、やがて人のおしへたるね
めなハ、せんしるをしき、此つきまえふみ月のふしくて死
ましその人の徳も天雲とふかくありしたのし。世

の常なりきハ今にはしめぬ事なれしるれハとくとく
はかりなき人のうきまさまさ事病なれとも、いとし出しき
事のことおもかくて世もかくて出るやともおそれけり
おもきう歌しきあつからすへきなまし、母おもふか
が度淡路守殿の北方と申すふ、その此つきあまりしそ
つとめよ。
続きに人をあわれ、それなる程ものの徳やみするなる立
久美今の殿の内なりしかしも、みこ月けいかりまう
にて紫月長月なりしかなりもてはきて神世との
はしめよなしとも分のし五七日ともあまり十日もありし。

今こそ勝頼の母君様のはいとみえしのふみをよみてひき
こえて
夜まむかハく世やなきかきられし何母ハ身をすて日救ふれしも
心よろてまいらせたに又先生君をは存すい君たれしもまこと二ッ
よくらうしうつねくしとおえて世すつ何しをさき御孫し
高やよおもらぬをしてもらしなき事うきりなし
そのこハられしはしくはへあれをもるほうる玉とこそし
てっしつきしうに行末ハ身のれちうらをあてて箕裘と
きこゆる事もすまへて何事も点つるもしくうしろこ
ぞそむしくおやむつ乱に雑熟なさいしくて心ほうさきして

いかでうらうつくるなすなきいのかぬ神も佛もなし．はしき
は大事をなすと心をしりとしのやうるふさくいしみそそうしう
ましくはわもうらとなるものわりしと神佛をうけきものに
みまいつるに三月はかあるてうさきえふきえ入てまへハ．
心花かれしくしてみつからさて忘ありしう御
あまりの事しはにおなさくしいて云す．
蛙とらつくのうちよくしてえるとくうちしいそねく．
万葉集に楓を蝦手ととなる所あれそいとむかしの末
しえなり様擬象にそそくこの頃そてむいつかう女の内をすれ
家にあそてうきとなれをきくつけすやありたむかし

おなじさまなれど田舎などにはふるきさまのこるなるを
きゝて足引の山田のそほづおのれさへ我をほしといふうれはしき
此のうたなく清輔朝臣集に女のもとにつかはしけるとて今のあるかし
そちかきとて立て隠しおかれたるはいまよりもおもひしけるもあるべき
すみける男そこにておもふなれしこともなれそめて出つかへてやりける。
ちかひしをおもひくらべてかなしみけるにもいかにおもひしらん
云部し。

扇のうらめといふことはなかめの紙をたかみのめは蟹の目
を暑きころは新宗集よりもちて大夫のすそ乃あふきめ
かれめかしこめてしらつかはしこれしくかしこめてつかはす

忍て、しかれば目のこまかなるはよくしく君がころもなりし
ものさしはよ逢し。大夫のすけがかはりは尭が家よしと
まかぬ人のあふぎは紙をはけるをむしとあつかふこれ延喜式にも
長寛の大神宮御装束遷宮用物などにも見ゆる。蟹目（カニノメ）綾などとも
あるは綾か。しぞつくりけるは綾にて、今時もビョウといふ。
蟹の目の細くこまかにて、末の見く大きなるはその名の似たれ
ばかくいふなるべし。

尭舜之民比屋可封といふ事、いにしへの人は例のことかめなるを。
世々のならはしにもこれは口に誦して当時をそしる風
俗はひとすゑいにしへはしらぬ事なりそれは此

するを解して堯舜の世を解きたらし古流のことなし。ハ
瞽叟も象もよき民と丹朱商均ハよき子と巴鯀ハ臣と
事遠りあてられとなしりしらぬまゝにまた臣子たるべく不
肖たりいはそれ比屋可封りのあかんかしの山いとめて代々
とげりとてよきもも生をもしてハあくるいかよ財政ハめてさ
くくとくろもれもいてくるを月弦のよしたしくけてあれ
といひてそあしき人いよくるひくる者あるいハ却てしへ
あるいハきにしてひろくうけるやうりすることそのおへ
しと今なかりにしと律なかりて經済のを律令をおかせ
其術あるりなし。學者のなをとくしへきことなかしなや。

京都を洛陽長安といふ事をおしてよく人のよくそしるす
なかりけることは國なさ二ッの京名あるを日本これに京をとり
そのまねして何ともなくいふ事とおもふ人あつてそハ甚く
おしらぬまゝとはこれ京を洛陽長安といふ事甚く。
桓武の御郡定めおいて左京を洛陽城右京を長安
城となつけれしあかは制のまゝいふたけよりこその
稱呼りおる文。これかしこう國もしらつてそのまねいし候
名っておけまなるらわちハまれて何事も古例を逐るとも
朝廷の恒典なるにこの二ッハころ國しそめてしつき京の名
なれハそれをうつけれとそこれ故実なりつけし。

わけまなぶにもわが友それなりもろこしの詩人の外迄
を牛門、小石川を礫川なといふ事ありて片ことハあはれなるを
ことわりえて人をいつくしむよしもあらす。
契沖が伊勢物語の注などにハひえの山をはたちはかり
かさねあげたらんばかりにしてよあるなどはたらしハ源氏にもとなど
こそよそとりなりハ後の人の事をかんがへるよりのことにて
さあれこれと知りへハ事ものを限るへきにもあらすといひてける
とハいふハことにいふ事この流ハおほけなかれとさき学ハ
当用をつとむることも大かたこころハ学のかたにしくへきなり
もそれを用るに便ありわかちかたる延約通用なとまる

事のミ多かり。
なかすゐのにの松にあはれにみじめのやうなおもひえしく老後に
述懐なとのおほかたハなにくれとなくおもふことをあはれみなしといふ事なれ
しても、もとのもに出さるゝ俗にいふ事なといふ事也。これ本居
先生の説なりけり。先生ハ古学者となりたる真淵の流として延
約相通をむねとして詞をとくなるに中古なりけるなり流の
おもむきハめつらしくよめてたし。
勢語臆断なとはたらなあはれなやすしいまたいはれなり
そのうちおもふにもしいたつてあるなの注に源氏物語の末摘
花など何事よりけてかたくなにてあるむしそのうちかのよき
ある

文字にしるさハ和かしかる例證なるべし。すべて注釈ハ
ほゞしなくてもきこゆべき事ハ例證なくても叶ふの
識るべしそれなくハ分れず。私ならバ何の注文
必要ならむ。何の例證なるらむ。近ごろ注にはくに
分かれ無益の注なしておくべしと思ふ不足なる物なるを
ちこしいふべらうと見るところなれバ。物学の人に此
春の神を佐保姫といふ。佐保ハ山の名。秋の神を立田姫
といふ事。立田も山の名なれバ。京の東西にあたつてある高
山なれバ。佐保も立田もなしの時代の説なるべし。
近頃よ小附といふこゝろハいと古し。拾遺集に村上御製。

車の枚つゐんとするなるありしハいとく小附をとゝのへて
とあり近き代芦庵といひし人や、留馬よりも行よりは
つけそへて鞭をおほする事などもあるなれどもあり。此人
ほかにも古今辞といふ事を唱へしかどもこれハいと散木の口
氣なり。いと又これも時政を憤りての述懐とぞきこゆる。
ほか隠遁の身にして何よりもいきどほろしかるべき。
清輔朝臣集に寒夜千鳥ひさきなるあその川原の
川おろしまさるやよその聲のはやなれ。そもしも山おろしハ
山よりおろすによりておろしなれバ、おろしといふを川おろしとも
いふ。英雄人を欺くなりの例にも泥ともなすべうらは。

江家次第春日使のところに中関白為使於饗時山崎家
飲水無時依無土器以茶垸献之関白有疑色饗時得意
給茶垸渡前ニ々末用之由歟とあり此比茶ハ僧家の西
よりてこしたるは会の饗なとしてハこれを設くるよりハなら
てしれなるを是れ〳〵家ニ茶碗のありしもめつらしかりしき
事なりけり磁器の通称となりにしなるへし。
前栽とは物語なとにも草花のうゑたる所をいへれと後撰
集ニ前栽にうへたらんとて又の春ゆきて咲かれハと
又家より遠き所にうつしたる時前栽のはなを花といへり
侍れるとて十訓抄ニ前栽の中の桜の木二俣に是程き

すかしきなかにも花紅葉のあそひもしたつなり。
親鸞聖人の門徒の在家入道の肩衣に上下もあり上下より
ときる有又経業方持の中ニも方上下の上ハかたきぬを
なしき事ニみえしハしニ十訓抄ニ大應の聖達可五
人あつまりて高瀬川ニ来るニ河内国石川郡ニ留まり
家主ハ紺の直垂をきて烏帽子をかしこまりてあり
むかしもはるかに行しはあるか。
茶垸を磁器の通称なりといふ事又一條十訓抄ニ近
く八億大寺の右の大臣にうちまかせてハいひおかしき事の
まうく師子の形をつくりたる茶垸の枕を奉るとあるにてや

うれ紙をやりく形を書て母みすひらかねは持ほまゝにうく
し入らり。八もひつくなされるに君にしきこなれよかてはね枕
まの枕なりし母ところゆ。磁器の枕をいふにそ似たり。今磁
器ある家なと茶碗屋といふ。よしなききゝわろし又
平野社もそのうち殊なる法皇崇なりたるを今も建
なるへくなれと。法社のいたう荒まし〻ひておかしき頃ふかし
よう心くるし。平家の氏神なりしかはし。まさに今は源
氏の代なれハ無沙汰なりなし民間にてはありけれハ
あるし。みのつらけ思あるにあらてし。平家の氏神なる
條ハ何くれの書もしにきえたるを抄して見おくすくし一ッ

二ツぞある。今鏡にも見えたり。そのかみの御母らは清盛の家
のあるじへにおはしけるの上達部殿上人その意にはなれて多く
きこえける。又平野ハあまたの家の氏神にておはしますなれど
清盛もさりがたき。その神垣のほとりのふりすさまし。清
輔朝臣家に。平家の人つらなれる所をもふひにこひの
保元平野の社ハ又このころの物まうでも絶しけりとか。
なくそえし。

人の実名を字音によぶ事。江談抄に。天暦皇帝召道
風朝臣勅云。我朝上手何人哉。申云。空海。敏行。時人難云。
於大師御名可奏音読也。敏行事ハ猶止志由岐止奈年可

寂蓮ハ、この外に道風佐理行成なとの能書なり。基俊ハ
頼政俊成定家家隆なとの歌人なり。平家物語なとにハ、実
定家成雅頼なとを何となき人とぞいへり。定家家隆なとを限と
して、後ハたえて聞えす。
壬生二品家隆の家もそれある人の子ともなくなりけり。侍
従隆祐朝臣の子になりて、やかて彼卿ト如何ハしりけり。
名をも何とかつくしきなきと沙汰しけるを、あつくの言
為後といふなる侍けるにすくなくなる、くさなりけるハ此度居
一家ハ、家隆の家をたてのこりけるハいとおしくたはれまる
らかなくやかくんとほしくけりけりなるとこそ

いふ人こともかハ割り限りなし。為俊か父恩書名為治き
こといふよ汝ハかゝるかしきなとハ申し、その後の法名家をもし
まねらせぬりしといつくいひてうつきまいらせねりけるあるへきと
いふ事はかりなるものをかしいはれて、法しゆく守殿の名
家をくて家隆とこそいひまゐらせておほ世よし文法し帖
後なれとは申しける。比興の事也。されとも入具せら
れたりとみえ、此ある古今著聞集にみえたり。そのうち
おもいをして富家よとこえ侍りけ三家へし。
此この果の事を結句といふ事、思ある事未の清息よ之
くるゆ。詩の結句よちからに、今ハあなくといふ事。速

歌の舞台よみつくし也。

享和三年癸亥十二月十五日成一巻ノ

正明

尾張書肆東壁堂製本目録　名古屋玉屋町　永樂屋東四郎

神代正語　本居大人著　全三冊

古事記傳　初帙　従一至五　同上　全五冊

同二帙　従六至十一　全六冊　同三帙　従十二至十七　三大考添共七冊

同四帙　従十八至廿三　全六冊　同五帙　従廿四至廿九　全六冊

同六帙　従卅至卅四　全五冊　同七帙　従卅五至四十　全六冊

同八帙　従四十一至四十四　全四冊　合四十五冊

同　目録　同右　全三冊

神壽後釋　同右　全二冊

玉くしげ　同上　全一冊

古今集遠鏡　同上　全六冊

源氏手枕　同上　全一冊

同玉小櫛　同上　全九冊

天祖都城辨々　同上　全一冊

御傳行長歌　同上　全一冊

玉勝間初篇　同上　全三冊

同　二篇　同上　全三冊

萬葉集略解　千蔭大人著　全三十冊
年々随筆　石原先生著　初帙六冊
江戸職人歌合　同右　全二冊
臣連二造考　同右　近刻
冠位通考　同右　嗣出
宰相通考　同右　近刻
尾張の家つと　同右　近刻
ひたのたくみ物語　六樹園大人著　全二冊
和名抄　大須本　全一冊
俳諧歳時記　著作堂先生著　全二冊

玉勝間四篇　本居大人著　全三冊
同　五篇　同右　全三冊
美濃の家づと　同右　全五冊
同　折添　同右　全三冊
地名字音轉用例　同右　全一冊
歴朝詔詞解　同右　全五冊
葛花　同右　全二冊
参考熱田大神縁起　全一冊
萬我のひれ　市川先生著　全一冊
遷宮物語　菊谷先生著　全三冊

国立公文書館
National Archives of Japan